

すが、その中にピスマークが許嫁に送つた手紙が入つてをりましてね、それをみると實にのびのびした美しい心でかかれてゐまして、バイロンの詩など引用してあつてほんとに美しいものでした。」

暫く爐邊の炭火をみなながら、

「いや私も非常時になりましたから、何か御奉公をと考へましてね、寺小屋をひらいたつもりで童話などかきました。」

さう言つて藤村氏は顔をあげて明るく笑はれた。その童話集「力餅」の中に「サクソニイの梅」といふ次のやうなお話が載つてゐる。

「獨逸のハイネと云ふ人が先輩ゲエテを訪ねた時のことは、まだわたしの若かつた頃に、ある書物の中に見つけて置いたことなのですが、あの話は今だにわたしの胸に浮んで來ます。若かつた日のハイネはあの先輩を問ねる時のことを胸に描きまし

て、もしゲエテに逢ふことが出來たら、あの事を話さう、この事を話さう、といろいろ思ひ設けながら長い冬の夜を送つたこともあるさうです。さて、逢つて見ると先輩はただサクソニイの梅のうまいことをハイネの前に言ひ出して、微笑を浮べて見せただけであつたといふことです。

皆さんはこんな話を聞いたら、さぞ物足らなく思ふでせうが。しかしこれはこれでいい。若い時分に先輩に逢ふことが出來ても、さういきなり、いろいろな話の引き出されるものでもありません。恐らく、その人を見たといふだけでも満足して若かつた日のハイネはさう失望することもなく、自分は自分の道を進まうと考へたことでありましたらう。」

藤村氏のお宅から出て、私は何げなくこの話を思ひ浮べてゐた。おいとまを告げたとき、藤村氏は玄關まで送つてこられて、「またこの近所をお通りのときは、お茶でもあがりいらして下さい」と丁寧に言はれた。蓋し私のこの訪問は、「サクソニイの梅」よりはずつと成功だつたやうだ。なほ文中にかいた藤村氏の言葉の文責

はすべて私に在る。

—昭和十六年一月—

回 想

二年前の正月の頃である。私は或る雑誌社からの依頼によつて、藤村訪問記をかいたことがあつた。私をはじめて親しくお逢ひしたのはそのときが最初であり、亡くなられた今となれば、これが最後の會見でもあつた。藤村先生は私に向つて、四谷の近くを通るときはいつでも立ち寄つて下さいと鄭重に言はれたが、何故かその後おたづねする氣持にはなれず、たゞ作品からのみ先生の風貌や日常をうかゞふにとゞめてゐた。

先生永眠のいま、しづかに御生涯をかへりみると、先生は當代にめづらしい一種獨特の生活態度をとつてをられたやうに思はれる。何故私はあるに近づき難い氣持にとらはれてゐたのであらう。藤村文學の一性格として、重厚と憂悶の詞は誰し

も指摘するところだが、父祖より傳はつたと思はる、「名のつけやうのない憂鬱」は、先生の晩年にいたるまで離れなかつたのではなからうか。そして先生の生活をして、孤獨な隱者の生活たらしめたのではないかと思つてゐる。隱者の生活を亂す勿れ。—さういつた嚴しい戒律のやうなものが、作品の門に張られてある感じで、私を一層近づき難くしたやうである。

藤村先生は、みづから求めて隱者たらんとしたのではあるまい。俗世に交り、あらゆる人々の中に氣輕に談笑することを望まれたに相違ないが、先生の心奥にはつひにそれをゆるさぬものがあつたやうだ。殊更に清淨たらんとしたのではない。現世を白眼視したのではむろんない。父祖傳來の宿命的な憂ひが、先生を孤獨たらしめたのである。己の意に反して。業の深い人を感じないわけにゆかない。先生は外にあらはれようとする生活よりも、つねに隠れよう隠れようと努めてをられたのだ。おそらく「新生」をかゝれた頃、隱者たる決心は確定的なものとなつてゐたのではなからうか。そして隠れることが即ち思索であり、凝視であり、作品の母胎で

あつた。

これはすべての作家に幾分かづゝ通ずるところであり、作家とは所詮一種の隠者である。私は思つてゐるが、明治から昭和まで、先生ほどこの氣持をつよめて来た作家はめづらしい。そして隠れるほどにいよいよ時代への思ひは深められて行つた。あたかも深い穴の底に蹲つて、大空の星を観測してゐる古代の天文學者のやうなところがある。四谷の御宅は、云はゞ市隱の宅であつた。亡くなられた現在、私はまづかやうな風格に想到せざるをえなかつたのである。たゞ一度の會見をかへりみると、大都會の只中で、不思議な隱者に逢つたやうな氣がしてならない。

—昭和十八年八月告別式の日—

多摩の丘

—多摩少年院訪問記—

多摩少年院は俗に不良少年の感化院とよばれてゐるところで、世間からはとかく敬遠され、甚だ特殊な世界のやうに思はれがちな存在であるが、實際行つてみて、係りの方から最近の補導方針をきき教育の有様などを瞥見すると、我々がいままで漠然と抱いた概念とはよほどちがつたものになつてきてゐることがわかる。不良少年の感化院といふ言葉のもつ一種陰慘な感じはどこにもない。八王子市郊外の、三萬坪にわたる小高い丘に建てられた舎屋の前に立つと、秩父連山や武藏野の豊かな風景が望見され、あたかも高原療養所へでも来たやうな感がある。當事者はむろん法律上から云つても、今日では不良少年といふ言葉は用ひられない。要保護少年といふのが正式のよび名である。少年審判所を中心に、この少年院や矯正院や特定の鍊成工場があり、其他に保護相談所や少年保護司もゐて、いまままでの懲罰教化主義

は改められ、今日の謂ふ鍊成指導に中心がおかれるやうになつたさうである。したがつて多くの少年工をもつ工場とも連絡をとる、同時に不良性を帯びた子女をもつ両親の相談相手にもなる。要するに少年少女の不良性を早期に発見して短期に治療せしめる。云はゞ一種の道場であり病院でありたいといふのが現在の目標なのだ。

その外見からいふと、たとへば結核の豫防に似てゐる。結核療養所などは特殊な施設のやうに思はれ、世間からも敬遠されがちなのであるが、しかし結核菌を潜伏させてゐる人間といふことになれば、これは非常に多いであらう。早期の発見と手當の肝要なことは云ふまでもない。早く醫師の診察をうけることが大切だ。ちやうどそれと同じ氣持で、自分の子供に不良性を発見したならば、警察の厄介などにならぬうちに、相談所に来てほしい、どうしても手に負へぬときは入院させて鍊成してあげる、—かういふのが當事者の氣持であらうと思ふ。ところが醫者へ行くやうなつもりで相談所を訪れる両親は實に少いらしい。院長の述懐によると三度門前まで来て、三度目にやつと意を決して訪れたといふ親もあるさうで、まして入院を申

請するなどよくよくのことであらう。親として忍び難いにちがひないし、また不良少年の感化院といふ從來の常識が躊躇させるのであらうが、自宅で叱つたり心配したりしてゐるうちに、いつしか不良性が重くなり、警察から呼出があつてはじめて自分の息子が萬引で留置されてゐることを知り、びつくりするなどといふ例が普通ださうだ。とにかく早期に発見して手當を考へること、院長は幾たびもこれをくりかへしてをられた。そしてかういふ點になると、もはや審判所や少年院だけの問題ではない。會社や學校はむろん、家庭における両親の態度が最も大事になる。

ところで不良性とは何か。これは簡単なやうでなかなかむづかしい問題である。少年保護の對象となるのは十四五歳から十八歳ぐらゐまでださうだが、かういふ青春期を取扱ふには誰しも苦勞するにちがひない。外部の影響をうけ易く、心も定まらぬ一種混沌たる生命に對してどうしようといふのか。見方によつてはこの時期の

少年少女はすべて或る程度の不良性を帯びるといへるかもしれない。つまり大人になるための智慧熱に罹るやうな状態を呈する。つまり生意氣になるのだ。それは笑つてすませる場合もあるし、笑ひ事でない場合もあるであらう。何が善良で何が不良か、その認定は結局両親や教育者の道徳的信念の問題にまでなるであらう。

むろん法律的にみれば、不良性の判断は比較的明白である。恐喝とか、萬引とかはつきり「罪」としてあらはれる場合が直接の對象になる。多摩少年院に收容される少年達は殆んどすべてこの明確な「罪」の判定をうけたものばかりである。しかし大人の犯罪と同一視することは出来ない。青春の歪んだロマンチズムである場合もあらうし、或は思春期に特有の異常と解されることもあらう。むしろ病氣といつていゝものかもしれない。大人の犯罪を訊問するやうなわけにゆかないのだ。と云つて放任は出来まい。放任しておけば何をやり出すかわからぬ危険な存在でもある。闇夜の路上で短刀をふるつて金品を強奪したり、故郷へ歸りたさに主家に放火したりするとき甚だ危険である。

かういふ状態にならぬ前に、早期に不良性を發見せよと當局は切望してゐる。實にその通りであるが、このことは考へれば考へるほどむづかしい仕事だ。最近になつて不良少年は激増したさうで、司法省保護局長の森山博士も「戦力増強と保護少年」といふパンフレットの中で、その理由を色々述べてをられる。たとへば少年に對する家庭教育の脆弱化、少年の勞働力に對する異常の需要、しかも少年工の指導監督の不充分なこと、戦争に伴ふ悪い影響（たとへば闇取引や道徳的頹敗等）が少年に反映すること、或は國民學校や中等學校の教育の低下、また警察力の不充分等とくに大都會におけるかうした現象が不良行爲を導くといふのだが、あらゆる方面に連關をもつ實に大きな社會問題である。

ところがかうした問題に面したとき、私のかねてより不満に思つてゐる、二つの態度が現在でも屢々みられる。その一つは問題の大いさを口實にして爲すべきことを爲さぬ。當然費用をかけるべき施設を怠つて、たゞ形式の上でだけ鍊成や儀式を行ひ、裏面では舊來の雇傭關係をすこしも改めぬ工場主が若し一人でもあるとした

ら、最もけしからん存在だと思ふ。形式の上で軍隊を模倣し、戦力増強を教説するばかりでは困る。その真意を力の及ぶかぎり様々の施設備や教導にあらはして行く工場ばかりになることを私は望む。體裁のいゝ責任回避を私は最も憎む。

それと同時にいま一つ私の不満とする態度は、今度はさういふ工場に働く監督や勞務者の一部が、設備の不充分を口實にして拱手傍觀してゐる態度である。不良少年が出てゐる氣分が弛緩しても、その一切を設備不完全の故に歸して、自らは自發的に何事もやらうとせず、ただ不平ばかりを言ふ。乃至は環境の説明にのみ浮身をやつして、さういふ恵まれぬ環境の裡に在つてもなほ己の心を鍛へて行かうといふ意志を失つてゐる。

私はさういふ奴隷根性を憎む。産業戦士に對する一般社會の尊重をいゝことにして之に阿ねて次々と不平をいふ一部の産業戦士を好まぬ。これは工場のみに限つたことではなからう。家庭の兩親も學校の先生も、時代に責任をなすりつけてゐては何事も出來まい。戦時でも平時でもかうした弱い性根からは永遠の不良が出るばかりだ。夫子自らが不良的存在である。

何が善良で何が不良か。外的にあらはれた「罪」を指彈するのは易い。しかし内在してゐる罪を適確に認むるには強い道德的信念が必要である。むしろ宗教的と云つていゝ自覺をもつ大人にして、はじめて少年に内在する不良性をも正しく認定することが出来るのではなからうか。これは教育の根本問題ともならう。ところがかういふ點になると我々にはおそろしく自信がないのだ。子弟の教育どころではない。自己教育においてさへ途方にくれる場合が少くない。しかし國民としてまた父親として、頑固とさへ思はれるやうな信念を腹の底にいれておきたいと私は念じてゐる。假りに私の子供が不良となつたらどうするか。乃至は不良性を認める根本をどこにおくか。尤も私には年頃の子供はない。長女はやつと七歳だし、長男は三週間前に生れたばかりだから、不良性を帯びるにしても前途遼遠であるが、いざといふ

とき、何となくにらみをきかしておきたいものだと思つてゐる。巍然たる父親になりたい。

私はいつの間にか教育に關する根本信念を、自戒として次の二つの言葉に要約するやうになつた。實に平凡な言葉であるが、「艱難汝を玉にす」といふことと、「卑怯な眞似をする勿れ」といふこととこの二つである。

どんな環境におかれ、いかなる不幸が起つてもこれに耐へよ。この弱さを外的事情に歸してはならぬと自他に戒めたい。不良少年が出たりする場合我々はいつてもその環境にまづ眼をむけ易い。家庭が亂れてゐるとか、工場設備がわるいとか、とかく原因を外部へもつて行く。その方がやさしくまた比較的明確なので何となく得心出来るやうな氣がする。全く無視すべき事柄ではないが、しかし本人はこれに耐へこれを超えるだけの意力を持ちあはせなかつたのか。意志薄弱は不良性の第一條件であるらしい。萬引するよりも、萬引したことを環境的に合理化しようとする精神の方がはるかに不良である。至れり盡せりの教育を授けてゐる所謂上流家庭に、

この種の内在的不良少年が多い。元來よい環境とか悪い環境とかは實に曖昧なもので、眞實を求める意志力にとつては、どんな環境もそのまゝでは悉く不適當になる。求道にとつて恵まれた環境などといふものはない。

「卑怯な眞似をする勿れ」——これは不良性を認定するときの大事な眼目となるのであるからうか。責任の回避、友人に對する裏切、これは幼少の頃からあらはれる現象である。大勢でいたづらなどして、大人に叱られると互に誰れさんがやつたのだ、自分は知らないと言ひあふ。不良少年が組で窃盜などした場合も、いざ警察にかかると、誰某にそゝのかされたと言ひあふやうな現象が必ず起るであらう。たとひ自分の仲間でも、そのうちの一人を首謀者にしてしまふ。むろん首謀者は法律的には一番重いにちがひない。しかし自分も窃盜しながら、つい今までの仲間のひとりに責任の多くを負はせて、自分だけは出来るだけ軽く逃れようとするその心理の方が、首謀者よりも更に悪いことはたしかだ。たとへ罪を犯さずとも、かういふ氣持の少年が成長すると、他を押しつけて己の立身出世をはからうとする。己の保

身のために友人を裏切るやうになる。少年の犯罪は群盜の形式をとることが多い。群盜の頭目よりも群盜の手下に更に悪質のものがゐることは注目し價すると思ふ。多摩少年院の院長も云はれたことであるが、刃傷とか強盜とか、一見激しい「罪」を犯したものが更生し易い。一番始末に困るのは幼少の頃から十錢とか二十錢づゝコソコソと盗んでゐる小さくて陰性の常習である。さもあらうと思ふ。これは大人の犯罪でも同様で、たとへば怨恨や激怒のあげく殺人を犯したものは、罪は重い、再犯の可能は病的でないかぎりまづあるまいと想像されるが、しかし拘摸のごときは、微罪ですむ代りに、再犯の可能ははるかに多いであらう。あらゆる犯罪の中で私は拘摸を最も憎く思ふ。いかにも卑怯な手段である。群衆の中にまぎれこんで、いかにも尤もらしく便乗しながら、人のふところをねらふ。

ところでかういふことは、一應心がけてゐるつもりでも、實際自分の子供の教育

といふことになれば、途方にくれることが多いにちがひない。「艱難汝を玉にする」からと云つて、殊更艱難にあはすことも出来ない。我々の分別で構想した艱難などといふものはたかがしれてゐる。また「卑怯な真似をする勿れ」を信條として、どんな小さな卑怯に對しても厳しく叱るのは大切な心構と思ふが、しかし人間は實に氣まぐれなものでとんでもないときに、つまり蟲の居所によつて分別もなく子供をなぐることもある。いついかなる場合に戒めるか、その場合を適切にとらへるのは實に至難であり、また微妙な問題である。それを一々氣にして、朝から晩まで子供の一舉一動を看視してゐるやうなわけにもゆくまいし、またそんなことをしてゐると、子供は親父をよほど閑人と思ふだらう。さもなければ神經衰弱と思ふだらう。學校の先生や両親が子弟を教育するのは當然の義務であるが、しかし教育してやらうといふその性根を一度厳しく反省してみる必要があるのではなからうか。人間が人間を教育することはどの程度まで可能なのか。この疑惑をもつ必要があると思ふ。教育の本体は自己の夢を新しい生命の裡に描き宿すといふ藝術的行爲にひとし

いと私は前著に述べた。その夢の高く激しいことは美しいにちがひない。だが藝術が必ずしも自分の思ふとほり出来あがらぬやうに、どんな教育の理想を抱いたところで、子供はそのとほりになるとはかぎらない。教育は藝術とひとしく無償の行爲であり、人爲を絶したものがあつた。教育に熱心な人ほどこの嘆きを知つてゐるであらう。子供にも誰にも洩らさぬこのひそかな嘆きが、あるひは後光のやうにそれとなく子供を眞に育てゝゐるのかもしれない。

私もひとりの父親として子供の美しい成長を願はずにゐられない。ところが年頃になつて、假りに不良性を帯びたとして、いまままでかいてきたやうなことを子供の前で實行しうるかと云はれれば、正直なところ今の私はどうも自信がないのだ。徒にまごまごしさうだ。保護相談所の前に三度足を運んで、三度目に入つたやうな心境になりさうだ。といふのは、私は子供をかく教育してやらうとか、不良性をかく認定してやらうとかいふ下心をもちあはせたくないものである。心の中ではいろいろ考へてゐても、人爲の表現において何となくはぢらひを覺ゆる。前にかいたことと

矛盾してゐるやうだが、子供の前では、とくに成長すればするほど、益々ものが言ひにくくなるのではなからうか。芝居じみたことは出来ない。史上に傳はる先賢烈士の子に對する遺訓も、今日いはれてゐるごとく果していかにめしくあらはに教訓的なものであつたのか。

私は無言の教を一番尊いと思つてゐる。つまり豆腐屋は一生懸命豆腐をつくるやうに、我々は机の前に坐つて一生懸命文章をかいてゐればいゝのだ。両親はその職域に全身をうちこむ、たゞそれだけのことが一番肝心であるらしい。父は職場に、母は臺所に。軍人の父は、戦死によつて最大の教を子に残すであらう。黙つて自分の仕事にうちこむことだ。何も云はぬことだ。しかし心の中でひそかに子供の成長を祈るがいゝ。祈りがきかれるか否か誰も知らない。しかし祈り且つ働いたゞそれだけの平凡な日常が、結局一番いゝ教育になるのではなからうか。子供はもと神よりの賜つたいのちである。人間の小智から割り出した教育方針がどれほど價值をもつか。私は結局かういふところへ氣持が落着いてくる。その上で、はじめて子に對す

る暗黙のにらみといふものもきくのではなからうか。

私は所謂教育に熱心な両親を好まぬ。中流家庭以上に屢々みられるやうな、紋つきを着て學校へ出かける有閑夫人的熱心さを好まぬ。たとへさうでなくても、子供の教育にあれこれ小細工を弄するのは考へものだ。小細工とは思はないでも小細工になる。さうかと云つて、所謂放任主義なるものも私は好まない。自分の家では子供は自由に野育ちでさあなどと云ふ両親を好まない。そんなのに限つて、コセコセ子供の世話をやきたがる。子供は斷じて野育ちで育つものではない。愛情で育つ。しかし愛情と云ふ言葉では育たない。沈黙の祈りで育つ。子供に對する心配と云ふものは、いくつによつてもきりのないものである。

私が多摩少年院を訪れたときは、五十名ばかりの少年達が軍事教練をやつてゐた。私はそれを一時間ばかり立つて眺めてゐた。前にも云つたやうにこの雰圍氣に

は異常な何ものもない。身體のがつちりした若人達が教官の號令で規律正しく動いてゐる有様は、模範少年の集團のごとくにさへ見える。院長はいつも表情をみてゐるのだと云はれた。一人一人の表情の變化を注意深く見る。入所したときは卑屈に狡猾な顔をしてゐたものも、かうした訓練を経るたびに次第に明るくひきしまつた表情に變つて行くといふ。私は何故か彼らの顔の一つ一つをまともに見ることが出来ない。すべて人間の顔をまともにはつきりみるといふことは、よほどさしせまつた感情に根ざしてゐる。かりそめの參觀人である私にそれが出来ないのは當然かも知れない。初夏の光に輝いてゐる武藏野の緑の方に氣をとられがちであつた。自然は美しい。少年達は銃を擔つて潑刺と行進してゐる。

ところで不良性の認定が内容的には甚だむづかしいやうに、その恢復の認定も亦困難なことになりがひない。ここに入所した少年はすべて法律的に「罪」を認められたものばかりであるが、彼らが再びそれを犯さぬであらうといふ確心はどうして得らるのであらうか。云ふまでもなく自發的な改悛は何によつて認定出来るのであ

らうか。徹底して考へるならば、彼らの全生涯をみる以外にあるまい。しかし當事者としてむろんそこまで氣長にしてゐるわけにゆかない。或る期間のうちに不良性を改めてやらなければならぬ。しかもそれは心の深奥のことに屬する。こんなもどかしさを當事者達はどうか始末してゐるか。

この少年院には刑務所のやうな嚴重な拘束はないが、しかし或る程度の拘束と隔離性は免れない。したがつて少年達と自由に語るといふことはゆるされない。私はどうかして彼らの心の一端になりともふれたいと思つて、止むをえず日記の提出を求めた。一日の訓練と作業が終つた後彼らは毎日日記をかくやう習慣づけられ、また教官は毎日の日記をみて、簡単な講評を加へることになつてゐる。私は二三の日記に眼を通してみた。これも人間の顔をまともに見ると同様、かりそめの心で爲すべきことではない。たとへて相手は少年でも、他人の日記をのぞくといふことは上等の趣味とはいへない。しかし敢へて二三の日記をみて、私はほつとした。どれもみな同じなのである。熱心に訓練をやります。日本少年として頑張ります。今日も

一日愉快に働きました。さういふことがかいてある。若し心の痛みを切實に訴へたものにふれたら、却つて當惑したであらう。

この日記のごとく、また整然たる訓練ぶりのごとく、彼らの心もまた眞底からさうなのであらうか。教官にみられることを豫想して、表面だけ體裁をととのへてゐるのであらうか。つまり不良性の恢復をこゝで信じるか、それともなほ疑ふか、といふ問題にぶつかる。總じて人を疑ふといふことはよくない。疑ひたくない。假りに彼らの或るものが再び不良行爲をして、再びこの門をくぐり、再び同じやうな日記をかいたとしても、その刹那だけは信じたいと思ふ。三度裏切られてもなほ信じたい。根本において人間の性の清いことを確信したい。

しかしこれもまた單なる參觀人にすぎぬ私の感傷かもしれぬ。かういふ場所に十年も二十年もつとめてをらるゝ教官にとつては、とかく容易に信じる事が出来るかどうか。

今度の多摩少年院の訪問には、文藝春秋社からも數人參加したが、その中の小田

桐君は嘗てこゝにゐたことがあるさうで（不良少年としてでなく、教官として）私は君の感想も二三聞くことが出来た。教練をうける少年達を前に、小田桐君は感無量といつた面持で腕組してしきりに考へてゐるらしかつた。分隊行進中の一人の聡明な顔付をした立派な少年を見て、「總じてどうもあゝいふのが却つて矯正しにくい」と小田桐君は云ふ。「取り柄のない子は取り柄のないままに落着けるが、頭のいい子はいろんな手を考へがちだ。それをずばりと見抜いて、どの程度に信ずべきかをきめるのは、教官の眼といふものだ。」といふ感想もふと洩らした。むろん私の抱く問ひに對する確答ではない。確答出来ぬといふのがほんたうであらう。私は案内して下さつた教官の方々に、この信と疑について質問したかつたのであるが、これは随分たちいつた質問であつて、何となく失禮のやうな氣がしてやめたけれど、今もなほ私の心にわだかまつてゐる。おそらく確答出来ることではあるまい。何が少年の不良であり、何が善であり、何が更生であるか。

私は参考のため福鎌恒子女史の近著「迷路群像」といふ本も讀んでみた。女史は十數年にわたつて少年保護の實務に携つた方で、この本はその詳細な體驗記であるが、實にむづかしい仕事であることがわかる。仕事がむづかしいばかりでなく、かういふ問題はその表現が更にむづかしい。人の心の底までを、たとへば不良少年をもつた兩親の苦衷や家庭の内情も語らねばならぬ、手紙も公開しなければならぬ、一步あやまれば獵奇趣味になり易く、世間のさういふ趣味に迎合しかねない。しかも終りはどうしてもハッピー・エンドになり易い。繊細な感受性ほど時に絶望を覺ゆることが多いのではなからうか。それをのり超えるにはよほどの信念がなくてはかなはぬことだ。

多摩少年院の場合もさうであるが、教官は文字どほり少年と起居を偕にしなければならぬ。身を以つて範を示さなければならぬ。たとへば駆足行進や遠路行軍をす

る折も、つねに先頭に立つ。若し一步でもおけると、次の日から忽ち少年の信用を失ふさうである。またこの仕事に熱心であればあるほど、單に外形の鍊成のみならず、少年の心の底までつきとめたい焦躁にかられるであらう。その時のもどかしさも察せらるゝ。長い間の経験は一瞥して少年の心の動きを見抜くにちがひないが、さういふ鋭さが却つて苦衷を増すであらうとも考へられる。醫學的判斷を下しても、統計をあげても、割りきれぬ性質のものではない。しかもこの種の仕事に對しては、當局も一般社會も口に云ふほど報いてはゐない。若い教官は別としてもこの仕事に生涯を傾け來つた人々には、もつと厚く勞苦に報ゆるところがなければならぬ。教官の日常生活がどれほど激しいものであるか。これは最近の方針の變化によつて一層増大したと思はれる。

前にも述べたごとく、この少年院は短期鍊成を目的とする。いままでならば審判所から直ちに歸宅を許したほどの程度の軽いものでも、今は一應こゝへ入所させて二ヶ月の鍊成をやる。二ヶ月ごとに新入生と卒業生があるわけだ。其後特定の工場

へ送り、四ヶ月間寮生活をやらせ、半年目には一般の勞務者と同じやうに扱ふのだといふ。尤もどうしても手に負へぬ少年は、仙臺の矯正院へ送つて、ここでは相當長い訓育を施すらしい。しかしこの少年院の目標は二ヶ月鍊成である。試みに日課を示すと次のとおりである。

午前五時半起床、點呼洗面清掃、六時皇民修鍊（禊祓、神拜、神勅詔勅奉讀、御製奉唱、宣誓、彌榮奉唱）、七時朝食、八時から正午まで軍事教練、武道、體鍊、皇民講話等、晝食の後、午後は五時まで作業（主として農耕）、夕食の後、午後七時から八時まで教養集會（朗吟、軍歌、講話、紙芝居、ラジオ等）それから日記をし、靜坐（反省祈念）して午後九時に就寢する。このすべてを教官は偕にし、しかも日記などを毎日丁寧に見てやらねばならぬ。むろんかうした方針は最近のことである、一日も早く心を改めさせて工場へ送らうといふ戰時増産の要求に基くのであるが、その成果がはつきりするにはなほ相當の時日を要するであらう。二ヶ月の鍊成が何をもたらずか。少年の不良性の恢復を認めるのは、前述のやうにむづかしいが、

わづか二ヶ月では教官にとつてもあまりにめまぐるしいであらう。かういふ仕事に熱心な人ほど寂寥を感じてゐるかもしれない。

前記森山博士は、戦時下においては少年も大切な人的資源であり、この人的資源を供給する一場面として少年保護の重要性を説いてをられるのであるが、私はどうしてもこの「人的資源」といふ言葉には賛同しかねる。人的資源に二ヶ月間號令かけて再び工場へといふのでは、何となく淋しい。私はこれらの少年を特殊なものとして必要以上に穿鑿玩弄する態度を好まないが、さうかと云つて短期錬成が錬成の形式化に終らぬか、その憂ひもまたぬぐひ難い。

多摩少年院の教官には、精神的に何か非常に大きな負擔が課せられてゐるやうに思はれる。二ヶ月のうちに身心ともに光明をもたらさうと眞剣に考へるならば、これは古來の哲人名僧も首を傾けるところかもしれない。しかしまた人間の心機一轉といふことは、時機によつてはほんの一瞬にして成就することもある。二ヶ月は長すぎる場合もあらうし、短かすぎる場合もあらう。むろんこれは少年の心の次第に基

くことだ。また少年は大人とちがつて罪の意識も浅く、わづかの清めによつてもとの白紙に還るかもしれない。二ヶ月の烈しい錬成がほどよいと考へられないこともない。しかし「喉もと過ぐれば熱さを忘る」といふ言葉もある。私にははつきりしたことがわからない。あれを思ひこれを思ひつゝ見聞の一端をしるす。

—昭和十八年十月—

富士の麓

—軍人遺族訪問記—

二二六

故陸軍歩兵曹長長田良禾氏は、甲斐國南都留郡下吉田の住人である。遠い祖先については、弓矢とる家柄であつたか、或は代々の農家であるか詳かにしないが、曹長は軍人として拔群の勇者であり、郷に在つては至誠廉潔の人として敬愛されてゐたことは、今日親しく語り傳へられてゐるところである。昭和二年、甲府第四十九聯隊に入隊、除隊後はこの地の機織工場に一工員として働いてゐた。支那事變に際し、昭和十二年九月應召（當時は軍曹）中支戦線に活躍したが、翌十三年八月、星子城外玉筋山附近の激戦において戦死をとげられたといふ。

未亡人玉江さんはこの地方の農家の出身である。小學校を了へると直ちに田畑に出てお手傳ひし、後に機織工場に轉じて、こゝで少女時代のおほかたを過した。文字どほり勤勞の裡に生育した女性である。長田家に嫁して後も、夫妻はともに同一

の職場に働き、營々として辛苦の生活を送つたさうである。夫君陣歿の折、玉江さんは二十七歳であつた。長女の和子さんは當時五歳、次女の恵子さんは三歳、長男の耕一君は二歳である。耕一君は出征中に誕生したので父君の顔を知らない。和子さんだけがおぼろげながら面影を偲ぶことが出来るといふ。

大月の驛から富士山麓に向ふ鐵路に沿うて行くと、この邊りは重疊たる山嶽にまつまれた狭い盆地である。すでに春であるが、寒風吹きすさんで、冷厳な山國へわけ入つた感が深い。しかしすべてを壓するごとく、白雪を頂いた富士の姿が鮮かにそびえ立つてゐる。私は目のあたり、かくも秀麗な姿を仰いだことはない。昔、山部宿禰赤人が詠じた有名な長歌の一節「天の原ふりさけ見れば、渡る日の、影も隠るひ、照る月の、光も見えず、白雲もい行き憚り、時じくぞ、雪は降りける」や、また高橋蟲麻呂が「靈しくも、坐す神かも」と讚嘆した歌などが思ひ出された。こ

二二七

の地方に住む人々にとつて、おそらく富士山は永遠の師であり、また故郷のなつかしい象徴であらう。

この沿線に禾生村といふ僻村があるが、アツツ島に玉碎した山崎保代中將はこゝに誕生された。赤坂とよぶ寒驛のほとりに、さゝやかな一寺がある。そこが中將の生家であり墓所であつた。私ははからずも車窓近く、中將の墓碑を拜むことが出来たのである。壯烈な死をとげた武人の靈は、いま故園の畑地の中に眠つてゐる。私は改めて周囲の風光を眺めないわけにゆかなかつた。自然は自然のままなるがゆゑに必ずしも尊いのではない。古人の遺芳や鮮血に色どられて、はじめて深い陰翳を與へられるものだ。云はゞ死せる人の思ひのこめられた風光こそ尊い。中將も、幼年時代つねに富士の靈峰を仰ぎつゝ生育されたのであらう。玉碎の刹那、ふと胸底に思ひ浮んだのも、故園のこの山の姿ではなかつたらうか。いま富士山を目のあたりにして、中將の遺書の一節、「護國の神靈として、悠久の大義に生く、快なるかな」を想起するとき、心から肯れるのである。「快なるかな」の一語、まさに富嶽の

崇高壯絶を彷彿せしむるに足る。

北海の氷島に玉碎した將軍も、大陸の山中に散華した曹長も、故郷の山につながら思ひは同一であつたらう。玉江さんの家は、下吉田の町はづれとおぼしきところにある。附近一帯は畑地、家もまばらなので、富士の姿は真正面から仰ぎみられる。町の助役さん達に案内して頂いて家に近づくと、機織の音が規則正しく聞えてくる。健康さうで明るい玉江さんは、楚々として未知の訪客を招き入れて下さつた。簡素な茅屋であるが、入口の左側は母屋、右手には二三坪の作業室があつて、そこに二臺の機織機を備へ、夫君陣歿後みづから働きつゝ遺子の養育にあたつてゐるのである。私は土間に立つて、ふと作業室をのぞいてみると、ひとりの手助けの人とともに、もうひとり國民學校の女生徒と思はるゝ少女が熱心に働いてゐた。それが今年十一歳になる長女の和子さんであつた。人手の不足と母の勞苦を思つて、學校が終ると直ちに歸宅して機織の前に立つのだといふ。他のお友達が遊んでゐる時間を、和子さんは夕暮まで作業室に立ちつくすのである。私は尙げなく、「これは

和子さんの方を表彰すればよかつたのに」と言ふと、玉江さんは心から嬉しうに微笑した。

ところでこの家は玉江さんの自宅であるが、これを建てるについては、一つの美しい物語がある。夫君の良禾さんは、至誠廉潔の人であるとともに、家庭的には實にいゝ夫であり父親であつたらしい。また老いた母君も出征中に病歿したに孝養を怠らなかつた。助役さん達の話によると、良禾さんは信心ぶかく、お寺の說法などにもよく出席して聴聞し、また子供の躰には入念の心を注いだといふ。その良禾さんに一つの願ひがあつた。自分の母と妻と子と、この一族が心おきなく住むことの出来る家があつたならば、どんなにいゝだらうといふ希望であつた。生前よく言はれたさうである。「一生に一度でいゝから、我が家とよべるところに住んでみたい」と。心からの憩ひの場を望んでゐたのである。それは良禾さんの切實な夢であつた。

戦死の報をうけとつたとき、玉江さんの念頭に浮んだのは、云ふまでもなく生前のこの願ひであつたといふ。夫君の勞苦からにじみ出た切實な願ひとして心に留めてゐたのであらう。玉江さんは思ひ立つた。「せめて英靈なりとも我が家に迎ひたいものだ」と。いさう決心したのである。むろん家を建てること云つても、無一物の身としては空想に近いことであつたし、不可能なこともよくわかつてゐた。しかし玉江さんは、夫の英靈のために、敢へてこの不可能を可能にせんとしたのである。八方奔走し、軍人援護會や町役場の援助のもとに、とにかく玉江さんは一軒の家を建ててしまつたのである。眇たる茅屋であるが玉江さんは夫の母君の位牌を奉じ、三人の遺子をひきつれてこゝへ移つた。英靈はやがて凱旋した。生前の願ひのとほり「我が家」へ凱旋することが出来たのである。

玉江さんの家は、世の常の家とはちがふ。そこはまづ第一に、英靈の憩ひの場であり、また神聖な御堂でなければならなかつた。靈前に日々の供物をさしげ、花を

飾り、在りし日と同じやうに玉江さんは仕へはじめた。三人の遺子の養育もまたここに行はれる。すべてが現に在すごとく、英靈中心の生活が始つたのである。何を先にすべきかは、常に人生における重大事である。再起の生活といへば人はまづ「物」を考へ易い。新しい生活設計のために様々の手段を考へるのは當然だが、玉江さんはその一切の淵源たるべき大本をまづ確立したのである。即ち祀りをもつて第一とした。家は、玉江さんの獻身と愛情の結實には相違ないが、それがおのづからにして我が國風の根本に通じてゐることは感動に堪へない。死者は死者としてでなく、さながら生ける人として「家」の中心に在す。聖堂である。すべてはこゝに發し、こゝへ還る。即ち玉江さんの再起は、愛と信仰に由つたといふべきであらう。

新しい生活が始つた。遺子の養育と、日々の糧と、援助の返還と、玉江さんの激しい労働の日がつゞいた。選んだ仕事は、云ふまでもなく機織である。それは夫君の業を繼ぐことであり、また自分の年來の經驗を生かす道でもあつた。即ち「家」は夫君の永遠の憩ひ所であり、聖堂であるとともに、またなつかしい職場ともなつ

た。三人の遺兒達の元氣のいゝ聲をきき、また自己の天職ともした機織の音を伴奏としながら、英靈は莞爾としてこゝに鎮まる。

夫君戦死の日から七年を経た今日、長女の和子さんは十一歳になり、恵子さんは九歳、耕一君は八歳になつて、今年から國民學校へ入るまでに成長した。「漸く一息つけるやうになりましたのよ」——玉江さんはしみじみと述懐した。いままでも苦しむと思つたことはない。たゞ四五年前、三人の幼兒が一度に病床に臥したときは非常に困つた。現在では、二臺の機織を自宅に備へうるまでになつたものゝ、その頃はまだ工場へ出て働かなければならなかつた玉江さんにとつて、これが唯一の苦難であつたといふ。かういふ述懐を聞くにつけても、軍人遺族のための托兒所の必要が痛感される。遺子を育てる若い未亡人は、これから益々職場へ出る機会が多いであらう。家内に手助けある人は別として、とくに農村地帯などでは是非とも托兒所を設けなければならぬ。若く優秀な保母を送つて、遺子達をのびやかに育てなければならぬ。英靈にとつてもそれが最も切實な願ひであらう。むろん玉江さんは設

備の不全を念頭になど置いてゐるのではない。何ものをも要求せず、不満を言はずたゞ一筋に英靈に仕へて忍耐の生活を送つて來たのである。

遺子達の養育について、私は玉江さんの氣持を聞いてみた。玉江さんは當惑したやうに、「さあ、別にこれと言つて考へたこともありませんが、みなお父さんの御心をまもるやうに……」さう言つて玉江さんは祭壇の方へ立ちあがり、やがて一冊の手帖をもつてきて私に渡された。それは良禾さんが戦陣に携へた日記であり、最後のところは遺言であつた。戦塵にまみれた手帖をめぐりながら、私は改めて良禾さんの人柄にふれたやうな感動を覺えた。武人としては細心沈着、また家庭の人としても實にたのもしいつかりした人であつたことがうかゞはれるのである。玉江さんのゆるしをえて、こゝに最後の日記を掲げる。

八月廿二日、晴、午後三時

出發一時間後、敵ノ歩哨ニ發見サレ猛烈ナル射撃ヲ受ク、最早最期ナリト覺悟ス

幸ニシテ一名負傷ノミニテ一時退却、歩哨五名ヲクリ出シテ右ニ廻テ前進ス。第二陣ニ掛リ非常ニ苦心スル、ヨウヤク敵陣ヲ抜ケ山ノ中腹ニ出ルト又敵ノ輕重ト出會シ、ヤリ過シテ目的ノ山頂目ガケテ急スル、六時四十五分玉金山ヲ占領ス。萬歳ヲ三唱、喇叭デ君ケ代ヲ吹奏シタ時ハ全員皆目ニ涙アリ。無事ヲ祝シ合ヒ、播揚湖ヲ目ノ前ニ見下シ、旭日ノ昇ルヲ拜シ乍ラ朝食ヲ終ル、實ニ心持チ好シ。山上ニテ又兵二名負傷、少隊長一名負傷スル、食物ハアレド水ガナクテ困ナンヲスル。空軍ハ頂上ヲ飛ビ氣強イ。敵彈ハ盛ニ來ル。時ニ正午、拾時頃ニ分隊松野武之助伍長戰死兵二名合計四名負傷ス、一小隊一名戰死。小銃彈石ニ當リ破片デ傷ヲ受ク、ノミノ食シタ位。三中隊個立ナルモ友軍段々戰果伸長シテ心強ク成ル。負傷山田軍曹、青木上ト兵、鈴木上ト兵、久保田伍長、市川伍長、犬山少尉、岡上ト兵、戰死二負傷九、二時半現在、犬山少尉戰死ス、敵ハ多數ヲ力ニ反覆突ゲキシ來リ死傷者多シ。今日人生最期ノ日ナリ。妻子ノ身ニ幸多カレト祈ルノミ、男ト生レ立派ニ死スル覺悟デアアル、潔ギ好ク死ス、喜ンデ呉レ

天皇陛下萬歲

(八月廿二日午後六時最後)

激戦のさ中にかゝれた最後の日記であり遺言である。廿二日の午後二時半から三時頃にかけてかゝれたことは、文中から察せらるゝ。句讀點のみ私の附したところで、他はすべて原文のまま、最後の括弧の中は、戦友のしるしたものである。戦陣匆忙のあひまに在つて、よく状況を述べ、戦友部下の身を思ひ、また最後の決心をばつさり傳へて、武人の面目躍如たるものがある。良禾さんの爲人は遺憾なく示されてゐると思ふ。玉江さんは日記を手にしながら言ふ。「子供達をみてゐて、これはいけないと思ふときは、お父さんの前へ連れて行つて、これを讀んでやることにしてゐます。さうすると子供は素直にあやまるので……。みんなお父さんのお蔭です」と。死によつて示す教育にまさる大なる教育はないであらう。父の英靈と遺言を中心に、一家は不拔の團結をむすび、かくて和かな歲月を送り迎へてゐるのであ

る。

玉江さんは多くを語らず、未知の私を何くれとなくもてなしてくださる。茶の間に炬燵をしつらひ、お茶や果實や煮豆などを出して、談笑の裡に一時間ほどを過した。助役さん達と一緒に炬燵に入つて話してゐると、實に和かで、まるで何事もなかつたやうだ。玉江さんは自分の體験を殊更に話さうともせず、また誇らしげなところなど微塵もない。すべては至尊の御恩と英靈の加護に由ると、謹んで語るのみであつた。明るく快活で、たゞ普通の世間話をしてゐるだけでいゝ。それだけで人の心を明るくするやうな、さういふ人柄なのである。目だつたところなどなく、ただ忍耐よく、平凡な一日一日を地味に暮して來たのである。

遺族に對する、この町の係の人々の心づかひもまた美しい。助役さんはじめ、援護の任に當つてゐる若いお坊さんも、玉江さんとお友達のやうに話してゐる。表彰

といふことはむづかしいことだ。一村一町の模範たることであるから、やゝもすれば堅くろしくなり易い。表彰が却て心の負擔となる場合もあらう。無理に一種の「名士」たらしむるやうなことが起らないとも限らない。しかしこゝではそんな影は少しもない。強いて美談とするでもなく、教訓の材とするわけでもない。目だゝぬやうに、平生のまゝに、在るがまゝに、のびのびとお暮しなさい。―助役さん達の眼はさう言つてゐるやうに思はれる。

玉江さんは多忙の身である。企業整備のため、この地方の機織業の大部分は轉換を餘儀なくされたが、幸にも玉江さんのところは残された。しかし一時は轉業を決心し、そのためミシンまで用意したといふ。今でも電力節約のため機織は夜は停止しなければならぬ。玉江さんは、夜はミシン臺に向つて、近隣の人々のもんべやほころびの手入をしなければならぬ。また機織の方は、残つただけに一層忙しいらしい。純白の布地が、丁寧に疊まれてかさねられてあつたが、すべて海軍への納入品であるといふ。その期日も迫つてゐるので、玉江さんは早朝から奮闘しなければな

らず、その間には三人の子供の世話もみるのである。

おいとまをつけて、入口の土間に立つと、作業室では相變らず機織の機械が規則正しく廻轉し、和子さんは熱心に立ちつくして操作してゐる。我々訪客があつてもふりむきもせず、たゞ一生懸命で母のお手傳に餘念がない。陸の英靈をまもる母子が、心をこめて織つたこの布地は、やがて海の丈夫たくまの肌をつゝむのである。

後

記

後記

この本にをさめた十一篇の感想は、さきの人生論の續篇としてかゝれたものである。前著では、教育や戀愛や結婚の問題など、我々の實生活において誰もが當面する日常的な課題を扱つたが、こゝでは主として古典歴史言靈、及び戦時下の思索情操に關する事柄を語つた。戦争以來これらのことは常に述べられてきたが、高踏煩瑣な學問乃至智識としてでなく、自分の日常生活に親しみふかく實踐するにはどうしたらいいか、云はゞ血肉化するための思索と方法を語つたのである。さきの本で部分的にふれたところを擴大深化するとともに、國の生命とは何かを明らかにしようとした點に、主なる目的がある。

十一篇の感想はおほよそ三つの部分にわけられる。第一の部分は、戦争、招魂、歴史、言葉の四篇であつて、こゝで私は現下の戦争の精神的意義を述べ、つゞいて

我が國の大本たるべき古典歴史と言靈の神秘について語つた。云はゞ國のいのちの根本の相を明らかにしようと思つたのである。第二は明晰、情熱、笑、簡素の四篇であり、前の問題を基として、日本人として戦時下必須の思索、情操、生活態度等について述べた。第三の部分は、友情、病氣、訪問の三篇であり、第一と第二の上に立つて、個々の具體的問題や場面をとつて所懐をしるしたのである。とくに最後の「訪問」の章には、私が今までに経験した感銘ふかい三つの訪問記を再録した。島崎藤村訪問記と、多摩少年院訪問記と、軍人遺族訪問記と、こゝに全く異なる三つの人生の姿をとゞめ、讀者の心の糧たりうるならばと願つたのである。

藤村訪問は或る雑誌社の依頼に應じたものだが、私にとつては藤村氏とお逢ひしたのは、これが最初であり最後であつた。思ひ出ふかい記念である。多摩少年院訪問記は、少年保護記念日に際し、司法省の委嘱をうけてかいたもの、軍人遺族訪問記は、軍人援護週間にあたつて、軍事保護院の委嘱によつてかいたもの、いづれも所定の雑誌に一度公表した文章だが、私にとつては考へさせられるところ多く、ま

た讀者にとつても戦時下人生の様々の面にふれるよすがともなるであらうと思つて戴せた。

戦争を單に刻々變化する戦局にのみ限定し、これを時局的に語つて一時の激勵教訓とするだけでは甚だ足りない。戦争を人生の深みにおいて吸収し、むしろ我々の人生そのものを戦争として一體化し、あらゆる日常にこれを深めることが大切であらう。つまり戦争を心の底から深々と呼吸することだ。この態度は前著においても私の心がけた點だが、本書においても一貫して持すべく努めたつもりである。戦時人生論である。そして戦時人生論は、また平時においても遺憾なく力を發揮しなければならぬといふのが、私の根本の願なのだ。激烈な戦亂に在つて、日々營々として働く青年男女諸君にとり、いさゝかなりとも心の糧となるならば幸ひである。

—昭和十九年四月—

著者



出版會承認 六一六〇〇二二號
昭和十九年八月十五日 印刷
昭和十九年八月廿五日 發行 (3000部)

『讀人生論』

◎定價 二圓五拾錢
特別行爲 二拾錢
相當 二拾錢

合計 二圓七拾錢

著者	龜井勝一郎
發行者	鐵村大二郎
印刷者	倉島清高
印刷所	東京都神田區須田町二丁目十七番地 東京都芝區田村町四丁目二番地
配給元	東京都芝區田村町四丁目二番地 日本出版配給株式會社
發行所	東京都神田區須田町二丁目十七番地 株式會社 生活社

電話 花(67)一四一五八
振替口座東京四三三〇一
會員番號 一四五一〇

991
86

終

訂價(稅共) 2.70